

# スペインの大学院におけるランドスケープ教育 ーバルセロナ自治大学景観・遺産マネジメントマスターコースでの経験からー

上川 夏林

(愛知県立大学・院)

I はじめに - ランドスケープという視点  
II スペインの大学院制度  
III 景観・遺産マネジメントマスター  
コース

IV 地理学とランドスケープ研究

キーワード：スペイン大学院，ランドスケープ研究，地理学

## I はじめに - ランドスケープという視点

大学を中心とした高等教育という選択肢が多くの学生に開かれている今日、大学は提供するコンテンツの多様性、あるいは具体的な事柄に特化した専門性によって独自性を主張し合っている。その中で日本での地理学は、伝統的な学問分野として地位を確立していると言えるだろう。しかし、日々移り変わる社会を反映した目新しさを持つ分野として魅力を放っているかという点、疑問が残る。地表面で展開される営みを広く扱う分野としての特徴を考慮すれば、地理学は関係諸分野との協働の中で広がりのある視点から学術的、また実践的な貢献が期待できるが、こういった側面はなかなか伝わりにくい。

そこで本稿では、人文地理学を専門とする著者がスペイン、バルセロナ自治大学の地理学科が設置したランドスケープ・遺産を専門とした大学院に留学した経験をもとに、スペインの教育制度や学習環境がランドスケープ専門家養成に与える効果を考察し、またその中で地理学のもつ特性がどのように発揮されるのかという面を明らかにしたい。ランドスケープというテーマは地理学の得意とする場所や土地に関する議論と密接に関わっているため、これからの学術界での議論の中でその中心を担う分野として貢献することが期待できる。これはランドスケープ研究の学術的な核を見極め、一つの確立した学術分野として歩むプロセス

に関わる観点であるともいえるだろう。

本題に入る前に、本稿で扱うランドスケープという用語について触れておきたい。日本語では人間が知覚する眺めとしての環境を指す用語として、「風景」、「景観」といったものがある。ここに近年加わっているのが「ランドスケープ」である。例えば中川（2008）によるこれらの用語の変遷のまとめによれば、20世紀以降、共同化された審美的な価値判断に基づく「風景」から普遍的な快適さを求めて客観的・定量的に眺めの価値を測ろうとする「景観」へ、という転換があったとしている。地理学においては、特に後者の「景観」が用いられることが多いように思われる。もちろん全ての場合においてこの定義が適当であるとは限らないが、景観は視覚的に表現された側面により強く結び付いた概念であるということと言えるだろう。

一方で近年では、鳥越（1997）が「サウンドスケープ」として論じたような、人間が全身感覚をもって環境と繋がる中に見出される「関係性」に注目した環境認知論が議論されつつある。ここには前述の二つとは少し異なる、環境と人間の相互作用的な結びつきに強い関心を持ったアプローチの広がりを見て取ることができる。これに関連してランドスケープは、場所の特性を生み出すミクロな動きに注目することで多くの要素の間に結ばれた関係性を理解し、そのまとまりとしての空間を理解することに焦点を当てた概念であると言える。そして本稿で論じるマスターコースが軸になっているのは、このランドスケープの考え方である。し

かし今後の議論の中で固有の制度・機関の名称、また計画論に関連する文脈については、一般的に通用されている「景観」という用語を用いて表現する点は合わせて言及しておきたい。

本稿では続く第Ⅱ章でスペインにおける大学院制度やその中で当該コースの位置づけ、特色を整理した上で、第Ⅲ章でコースのカリキュラムと協力関係機関一覧を概括し、コースが目指す教育内容を検証していく。第Ⅳ章では具体的な経験を紹介する中で地理学がランドスケープ研究に果たしうる役割を考察し、最後にランドスケープ研究を支える大学院教育環境のあり方を展望する。

## Ⅱ スペインの大学院制度

まず本章ではスペインの大学院制度を概括し、本稿で扱うマスターコースの制度上の位置付けと特性を明らかにする。また本マスターコースの連携機関を2つ取り上げ、連携によってもたらされる学習環境への影響をまとめる。

### 1. 独自マスターコース

スペインの大学が授与する大学院学位には、スペイン科学・技術革新・大学省に登録された公式コース(máster oficial)と、大学が独自に設定する独自コース(máster propio)の二種類がある。一つの大学がこの両者を抱えていることも多く、バルセロナ自治大学(Universitat Autònoma de Barcelona, 以下 UAB)でも多くのコースを提供している。両者の資格としての最も大きな違いは博士後期課程への進学資格として認められるかどうかで、現在のスペインでは後者の独自コースではその効力は認められていない。一方で就職活動においては学位の名称というよりは、独自の教育課程の提供する内容の専門性が積極的に評価される。また独自コースの教師陣は大学本体の教員のみだけでなく、外部から幅広く招致することが許されているという側面もこの特性を後押ししている。以上を竹中(2012)の整理したスペイン地理学の二つの潮流、すなわちアカデミック地理と職業地理に当てはめると、公式コースは主にアカデミック地理を、独自コースは職業地理をそれぞれ得意とするといえるだろう。

本稿で取り上げる景観・遺産マネジメントマスターコースは独自コースであり、その制度上の特性が強く表れている。まずこのコースはUABの地理学科を母体とし、大学本体の正式な承認によって設置されてい

る。全体ディレクターは地理学科に所属する地理研究者であるフランセスク・ムニョス(Francesc Muñoz)が務め、プログラムの内容は氏とその協力者によって独自に発案・運営されている。つまりムニョス氏はいわゆるオールラウンダーとして奔走するわけだが、様々なバックグラウンドを持つ教員、学生を束ねる立場にある彼が地理学を専門としているところにこのコースの特性が表れてくる。彼の人脈の下で教師陣が招かれるという面だけをとっても、レクチャーの内容へ及ぼす専門的背景の影響力が大きいことは明らかである。

一方で、認可されたコースとして大学本体からの組織的支援を受けるという側面もコース運営の前提とされている。これは内容では独立性があるものの、経済的側面や事務的な手続きなどは全て大学の持つ枠組みに依存して行われている点にもみることができる。

例えば財務的な運用に関しては、大学本体による管理が適宜不可欠であるという制約を受けている。独自コースは通常の数倍の学費がかかると言われており、著者の在籍したコースの学費はおよそ1年半にわたる課程の全ての諸費を含めて10,200€と、日本の国公立大学大学院の学費と比較しても高額である。これをもってユニークな内容が提供されることが約束されるとは言えるものの、学外、さらには国外でのプロジェクト演習もかなりの頻度で行われるため、ディレクターであるムニョス氏はその度に必要となる大学との交渉に苦心している様子であった。実際にプロジェクト演習で訪れたヴェネツィア、リスボンなど国外への移動費と滞在費はその都度学生が立て替え、成果を証明する制度的な手続きが大学によって承認された後に大学から振り込みが行われるという形式であった。実りのある教育活動実現のためにいかに大学の理解を求めるのかという部分においてコースの学術的意義が検討され、大学院課程としての正当性が保証されると考えれば、この大学本体との繋がりには相応の意味があると言える。しかし一方で相当の根気が求められるというのもまた確かである。

### 2. 外部組織との連携

制度上では大学に設置されているUAB景観・遺産マネジメントマスターコースだが、その活動内容を支えているのは外部の機関との連携によるところが大きい。中でも、バルセロナやカタルーニャ全体におけるランドスケープ・文化振興の中核を担う二つの機関、バルセロナ市歴史博物館(Museu D' Història de

Barcelona, 以下 MUHBA) とカタルーニャ景観観測所 (Observatori del Paisatge) の全面協力は本コースの要であった。

一つ目のバルセロナ市歴史博物館は、博物館というハコの中で展示を行うというだけでなく、地域に点在する遺産を文化的拠点としてネットワークを組織し、都市の文化力を内外に発信することを目指す「ミュージアム」である。旧市街の中でも中心的な場所に位置する MUHBA は、バルセロナ都市圏に散在する拠点を束ねる、一貫性のある文化活動の中心地として機能しており、本マスターコースの学生は其中で市行政や地域と関わる実際のプロジェクトの若い担い手として受け入れられる。授業や日々の諸プロジェクト、またワークショップの作業の拠点もこの MUHBA の事務所が割り当てられており、日々目まぐるしく動くまちの只中に身を置くことになるという点においても刺激の多い環境である。

もう一つの機関は、カタルーニャ景観観測所である。カタルーニャ景観観測所は 2005 年に制定されたカタルーニャ景観法に伴って設置されたカタルーニャ自治州政府による公的機関であり、初代所長はジローナ大学で人文地理を講じるジュアン・ヌゲ (Joan Nogué) が務めた。景観観測所は景観に関する研究、また景観政策に実質的な助言・介入を行う専門機関として、同景観法の中に位置づけられている。

そして本マスターコースは、この景観観測所の設置に結実したような景観への関心の高まりを教育の面から支えようとする動きの中でスタートしたとみることができる。学生は、景観観測所所長の講義やシンポジウム等への招待参加などを通して、カタルーニャ自治州全土を網羅する景観カタログの作成や地域での景観政策の制定などに関わる生のプロセスに触れることができる。

これら二つの機関の協力は、マスターコース履修者が教室の中だけでない実践的な知識・見識を深めることに寄与している。これはランドスケープという一つのテーマについて実際の場所で管理・運用するプロセスを可視化して伝えるという面で、職業地理的なアプローチに有利である。一方で、それらの実践がどのような思想・方法・分析に基づいて行われるのかという計画者内部の意図が、実際のランドスケープにどう発現するかといった部分を理解することを助けるという一面もあり、受講者が大学院生というフラットな立場であるために可能な、開かれたアプローチである。以上二つの機関との密な協力関係は、大学以外の機関が

関わることで可能になる利点をもたらしており、独自マスターコースの持つ強みといえる。

### Ⅲ 景観・遺産マネジメントマスターコース

ここまで紹介してきた制度・機関の中で運営されていた UAB 景観・遺産マネジメントマスターコースは、筆者が在籍した 2018 年時には 5~6 人と少人数ながらも世界中の様々なバックグラウンドをもつ学生で構成されていた。やはり圧倒的に多いのは建築、都市計画を専攻する学生だが、他にも政治・経済学、哲学、芸術教育など多岐にわたる学生が在籍し、出自も中南米、アジア、中東、ヨーロッパと多様であった。その中で日本人学生が筆者一人であったことは言うまでもないが、地理学を専攻する学生が他には一人もおらず、在籍期間全体を通してほとんど出会わなかったことは意外であった。そこで本章では、本マスターコースがその教育課程において学生に教授することを目指す内容の核となる部分をカリキュラムから検証することを試み、次章への橋渡しとする。

#### 1. コースの持つ基本的な問い

前章でも述べた通り、当マスターコースは地理学者のムニョス氏によってデザインされており、中でも特に彼の著作である『俗都市化』[フランセスク・ムニョス, 2013] に論じられている現代都市の特性、またランドスケープの捉え方がそのベースとなっている。本著は、今日の都市ではその固有性とされる部分が切り取られ、場所のコンテクストから離れたところで再生産されている現状を指摘する。都市を代表すると銘打たれたイメージのみが消費され、ローカルで育まれたはずの要素がグローバルな期待に応えようとし始めるといった今日的な現象を俗都市化として批判的に捉えている。そしてこの現象が進行した結果、都市は真正性を失ったランドスケープを呈するに至る。ここで議論される「ランドスケープ」とは、都市を絶えず動かす様々な社会・経済・文化的活動から生み出された都市の「かたち」であり、これは人々のライフスタイルと呼応して構築されていくものである。

本コースでの中心的な問いとは、まさにこのランドスケープを形成する過程にいかに関与しマネジメントを行うかというものであった。つまり本コースは地理学的な問いの上に諸分野との協働からなる実践が重なるという構造になっていて、これは実際の都市政策を検討・運営する実践的な場においても実現しうるかた

ちであるともいえる。例えばスペインでの職業地理専門家の職場についてスペイン地理専門家協会が2003年に調べたデータ（Mongil y Tarroja, 2004）では、大学39%、企業34%、行政27%となっており、全体の半数以上が実践分野での就業となっている。この点に加えて先述の履修学生のプロフィールも考慮すると、本コースも極めて実学的な見地を提供する即戦力養成型のプログラムのようと思われる。そこでここでは2019年度のカリキュラムを用いて実際のプログラムからマスターコースの具体的な教育プランを検討し、どのようなランドスケープ教育を目指しているのかという点について考察を深めたい。

## 2. カリキュラムから見るコースの特性

マスターコースでの基本的なスケジュールは、週2日の授業と週末のエクスカージョン、各種の都市プロジェクトへの参加からなる。さらに月によっては、国内外での1～2週間のワークショップ、景観観測所などの主催する国際会議への参加が並行して進行していく。そしてこれらは全てについて、本マスターコース全体のカリキュラムに対応した時期・内容がプログラムされている。このカリキュラムには合計12個の学習目標が設定されており、授業は6つの基本コースとさらに6つの発展コースから構成される（表1）。ここに設定されたカリキュラムを見るだけでも、このマスターコースにおけるランドスケープの理解のしかたが少なからず理解できる。

まず第一に、カリキュラムには「歴史」、「文化」といったキーワードはほとんど出てこず、代わりに「heritage=

遺産」という概念が用いられている。これはランドスケープそのものを一元的または狭義な枠組みに当てはめずに、多くの要素が結びついて発現した結果として検証し、見出されたランドスケープの価値を遺産として捉えようとする試みである。日本でも耳になじみのある「文化的景観」や「歴史的景観」という言葉の意味するところと、「ランドスケープ」と「遺産」の併用が表そうとしているものの微妙な違いを汲み取るのは難しいが、後者では現在進行形の時間の最先端にいることを自覚した、マネジメントの立場に立っていることが特徴的であるように思われる。生態系が生み出す地表面の様相、同時に進行する気候変動、グローバルツーリズムなどが都市にもたらし得る新しいランドスケープにいかにか介入し、地域に育まれた環境と大きな影響力の間をどのように取り持ち調和させるのかといった側面から切り込むかなり幅の広い授業構成である。

さらに、ランドスケープという概念の持つ多くの側面を掘り下げることで学生のもつランドスケープに関する視野を広げ、将来的には社会の中でランドスケープに携わる領域を新しく押し広げていく人材を育成するという点にも焦点が当てられている。例えば授業には、大学以外の数多くの公的機関、研究機関、民間団体や企業など外部からの講師が招かれる（次項表2）。彼らによってランドスケープが持つ機能的・生産的な側面が経験を通じた説得力のある議論として持ち込まれ、学生は将来的にコースでの学びを発信するためのビジョンを描くことができる。これは独自マスターコースに特徴的な面白味のある一面であると言えるが同時に非常に情報量が多く、それぞれの学生は自らの専門

表1 パルセロナ自治大学2018-2019年度景観・遺産マネジメントマスターコースのカリキュラム抜粋

基本コース
1. 今日のランドスケープと遺産をつなぐ：基本概念
2. ランドスケープへの介入と遺産マネジメント：方法論の基礎
3. ランドスケープ分析：生物物理的側面と文化的側面の接続
4. ランドスケープと遺産のための新しい戦略：方法論と世界のプロジェクト事例
5. 都市・地域の動態とランドスケープの生産：ランドスケーププロジェクトを更新する
6. ‘遺産’の再定義：ランドスケーププロジェクトにおける革新と創造
発展コース
1. 生産的/創造的ランドスケープ：起業家的ビジョンと地域開発
2. 気候変動に強いランドスケープ/低炭素型環境：気候変動に直面するランドスケープ計画
3. ランドスケープと遺産への一時的な介入：ランドアートを超越して
4. ランドスケープ、新しく生まれる遺産：集合的公共領域
5. グローバル・ツーリズムのランドスケープ：革新的遺産マネジメントへの挑戦
6. スマートな遺産：持続可能なスマート・シティ実現の触媒としての都市遺産

（資料）パルセロナ自治大学景観・遺産マネジメントマスターコース資料による



表2 バルセロナ自治大学2018-2019年度景観・遺産マネジメントマスターコース講師の所属機関 (抜粋)

<p><b>【中核スタッフ】</b>                  バルセロナ自治大学                  バルセロナ市歴史博物館                  カタルーニャ景観観測所                  バルセロナ芸術・デザイン学校                  ペスカラ大学(イタリア)                  リスボン大学(ポルトガル)                  ランドスケープアーキテクチャ国際連盟</p>	<p><b>【地域機関所属スタッフ】</b>                  UAB 文化遺産戦略研究室                  UAB スマートシティ・持続可能都市戦略研究室                  UAB アークティック・リサーチセンター                  UAB,B01 Arquitectes                  AIGUASOL(バルセロナ)                  カタルーニャ国際大学                  カタルーニャ工科大学                  Curator(バルセロナ)                  生態学研究センターCREAF(バルセロナ)</p>
<p><b>【国際機関(スペイン国外)所属スタッフ】</b>                  レッジョカラブリア地中海研究大学                  ヘルシンキ大学                  フェデリコ二世ナポリ大学                  Buro Happold Engineering(イギリス)                  ヴェネチア工科大学 IUAV(イタリア)                  Union-Nikola Tesla 大学(セルビア)                  イリノイ工科大学(アメリカ合衆国)                  イーストロンドン大学(イギリス)                  パドヴァ大学(イタリア)                  ルーヴェンカトリック大学(ベルギー)                  国際デザイン研究所 IMM(イタリア)                  ローマ研究所 CROMA(イタリア)                  ニューヨーク工科大学(アメリカ合衆国)                  マンチェスター・メトロポリタン大学(イギリス)                  コルトレイク大学(ベルギー)</p>	<p><b>【地域専門機関所属スタッフ】</b>                  バルセロナ州議会都市計画・地域研究所                  グローバルヘルス研究所 IESGlobal(バルセロナ)                  都市・自治体連合 USLG                  UN-HABITAT(バルセロナ)</p>

(資料) バルセロナ自治大学景観・遺産マネジメントマスターコース資料による

分野との折り合いや応用を常に自覚し、実感を持って自分の見地を開拓していくということが要求されるという点も特筆に値する。授業で扱われる内容が実際の現場にどのように応用されるのかということは、それぞれのコースの間に行われるプロジェクトや、特にワークショップで強く自覚することになる。次節ではこの点について詳しく論じていくことにする。

### 3. ランドスケープへのアプローチ

先に見たカリキュラムにもう一度目を向けると、発展コースの二番目には気候変動への耐性に向けた戦略とランドスケープの関わりが取り上げられているのが分かる。日本では“climate proof”はあまり聞きなれない用語であるが、一般的に都市計画にかかわる分野では気候変動やそれによって起こり得る自然災害への耐性/回復力を指すことが多い。これを都市のデザイ

ンの中に盛り込む動きが世界的な広がりを見せつつあり、本マスターコースでも中心的な研究テーマの一つであった。そこでここでは、多くの分野から高い関心を集めるテーマに取り組むにあたって、専門分野による基本的な理論や発想法の違いが問題対象へのアプローチの違いに顕著に表れた例を考察していく。

マスターコースのプログラムが中盤を過ぎた頃、バルセロナ郊外の自治体ガバ市で気候変動をテーマに据えたワークショップが行われた。全体を束ねるテーマには「気候変動に強い都市をつくる戦略とランドスケープ計画」が提示され、現地自治体に提出する気候変動に対する適応策を一週間の現地滞在期間中に作成することが求められた。このワークショップではマスターコースが連携しているイタリアのペスカラ大学で建築を専攻する学生も参加していた。筆者の所属した班では、筆者以外の4人全員がペスカラ大学の学生で、

地理学またはランドスケープを専門として扱うのは筆者一人であった。そしてランドスケープという共通課題の下、筆者の班には「夏季にビーチに集中する自家用車の軽減を目標とする持続可能なモビリティネットワークの創出」という課題が割り振られた。

そこで当班が提案したのは、内陸部に広がる農業用地にサービスを生み、自家用車以外の訪問者にとって魅力のあるエリアとして提案することで交通集中を緩和するというアイデアであった。ここに紹介している図（図1）は実際に提出されたもので、右が著者作成、左がその他の班員が作成した図である。この成果物の一部のみでも明らかであるように、筆者と班員の間では同じ目標を共有しているにも関わらずそのアプローチの仕方が全く異なっている。建築専攻の学生はサービスの創出として、最大限の数值化可能な効果を発揮する構造物の提案を矛盾のない計算に基づいて割り出し、その実現に向けて具体的な場所の選択、周辺環境を調整、という考え方をとった。対する筆者は、まず実際のプロジェクトを適用することになる農業用地の調査に出かけ、現地で得た情報の整理・検証から見出したリソースを最大限活用し、その潜在的な価値を引き出す補助的な装置の導入を検討するという方法をとった。

両者の違いを大きくまとめるとするならば、対象の持つ多面的な側面をいかに調和させるかという段階での相違であると言えるだろう。前者は明らかな効果を生み出す装置が新たに導入され、利用者に対して用途や成果が伝わりやすく、管理者にとっては数値的に分かりやすく成果を算出できるという点で説得力があり、設備の定期的な更新を効率的に行うことができそ

うである。後者は、元々その場所にあったものを外部者の目によって再発見することを出発点の問題意識としたため、短期的な成果が非常にみえにくい。ゆえに提案者の意図が面白味をもったコンテンツとして訪問者に伝わるかどうか成否の鍵となりそうである。このように、景観・遺産マネジメントマスターコースでは、学生の提案によるマネジメントの視点がふんだんに取り入れられている。

#### IV 地理学とランドスケープ研究

前章で取り上げた景観・遺産マネジメントマスターコースに特徴的なランドスケープの捉え方とそのマネジメントの提案という観点からは、地理学とランドスケープ研究との関わり方を考察する上で手掛かりとなる点である。そこで本章では、前章最後に触れたワークショップでの筆者自身の具体的な経験に照らして、多くの分野との協働の中で地理学の果たしうる役割について考察・提案を試みる。

##### 1. ランドスケープ研究における協働のプロセス

先に見た例から、地理学を専攻する者がランドスケープ・計画への関わりの中で貢献できる点が見えてくるように思う。ランドスケープや遺産をマネジメントするというアプローチはすでに日本でも試みられつつある。場所と人が織りなす環境を読み解き、その関係性からみえてくる景観を計画する手法を提案する小浦（2008）や、生態環境と人間の活動が有機的に結びついた地域環境を適切に理解することが両者にとって有効な計画を導く手掛かりになることを議論する武内



図1 建築の学生の成果物（左）と著者の成果物（右）

左：自転車で行く通行者が快適に過ぎる様々な種類の停留所を設置する。この例は軽食用にデザインされている。

右：農地を這う小路に数多く点在する果樹の存在に注目し、生態系の働きと人間の介入の相互作用が積もった空間としての面白さを生かした活用を提案する。

（資料） 筆者とペスカラ大学学生作成の資料より

(2006) など、ランドスケープを計画する際の考え方、手法の提案が広い角度から試みられている。「ランドスケープアーキテクチャ」、「ランドスケープデザイン」といった様々な実践的分野が注目される中、地理学は古くからランドスケープそのものを扱ってきた分野として位置づけることができるのではないだろうか。アメリカの歴史地理学者ペイカーが歴史学と地理学の基礎的相違点を語った中で、時代と場所の両方に人が住み、どちらもその時々の人々によって構築、体験されたことを認めた上で、地理学は場所に焦点を絞る(ペイカー, 2009)と表現した通り、地理学は場所と向き合うことが基礎となる分野である。ランドスケープは必ずどこかの場所に立ち現れる。この意味で地理学はランドスケープ研究に最も近い分野であると言えるかもしれない。

気候変動、新たなテクノロジーの出現、絶え間のない開発は常に新たな都市のかたちを要求し続け、私たちは常に新たなランドスケープを生み出している。これを計画する場所のあり方のマネジメントを、今後の地理学から提案することができるのではないだろうか。ランドスケープに関わる分野は幅広く、それぞれが異なる視点から貢献しようと試みているが、その橋渡しは容易ではない。先述の筆者が参加したワークショップでも、時間がない中でも実際に対象地に行つて観察を行うべきであると班員を説得するだけでも骨が折れた。しかし多くの分野間での連携が必要とされるランドスケープ、または遺産のマネジメントの場では、分野ごとに分業するというアプローチでは不十分な効果しか生まないのではないだろうか。ここに、それぞれの役割を理解しつつ、最初から最後まで一つのチームとして対象へのアプローチを試みる協働のかたちをとることが一つの可能性として浮かび上がる。地理学はその中でも場所という全体の議論の基礎となる見地を提供する立場として、マネジメントのプロセス全体に一貫性をもたせるディレクターとして活躍するのはないか。

そして本稿で取り上げているマスターコースが、ランドスケープという一つの研究テーマのもとに異なる分野を結集させ、地理学のもつ場所への知見の上に協働を実現するモデルの先駆けともいえるのではないだろうか。本マスターコースでの活動は先に述べた多分野の共働のかたちの縮図のような環境であり、ランドスケープ・遺産をマネジメントする立場をこれから目指そうとする世代が大学院で本格的に研究に取り組み始める時期からこれに触れることは、今後のキャリア

へ大きな影響を及ぼすに違いない。多分野との共働の中で実現される自らの専門の特性や偏りへの自覚は、その深化に繋がる重要な一歩であると言えるのではないだろうか。

## 2. ランドスケープ研究のこれから

本稿ではスペインのマスターコースを修了した筆者が自らの経験を振り返り、ランドスケープに関わる教育・研究における地理学の立ち位置を分析した。日本では一般的ではない、もしくは実現が難しいとも言える国際的な連携の枠組みを柔軟に取り入れたな環境ではあるが、大学院課程における開かれた学術交流の重要性は明らかである。

本マスターコースは一年の授業期間と半年のファイナルプロジェクト準備期間からなる短期集中型の課程である上に、実践的な活動の多さから、職業的なキャリアアップを目指して受講する学生が多い。講師陣が所属する協力関係機関への就職アクセスも開かれている。その一方で、若手地理研究者を牽引するムニョス氏やバルセロナ自治大学に所属する多くの教師から少人数型の授業で密に指導を受けることができるという機会は、研究を志す学生にとっても有益なものである。学期終わりにムニョス氏が、同一学年から2人の進学希望者が出たことはマスターコース開設を計画してから約20年目にして成し遂げた大きな前進である、と述べたのも本心であるらしかった。スペイン、バルセロナにおいて、ランドスケープ研究という分野は、教育の面から着々と実績を積み重ねている。今後のランドスケープ研究・実践を担う人材を育てようとする官学民一体のバルセロナでの試みは、これからの日本でのランドスケープ教育がとりうる進路の可能性を示唆している。

## 文 献

- Diari Oficial de la Generalitat de Catalunya Núm. 4407 – 16.6.2005
- Mongil, D. y Tarroja, A. 2004. Los perfiles profesionales de la geografía en España. Report for the Asociación de Geógrafos Españoles. [http://age.ieg.csic.es/docs\\_AGE/04-09-Perfiles\\_Pro\\_fesionales.pdf](http://age.ieg.csic.es/docs_AGE/04-09-Perfiles_Pro_fesionales.pdf) [Cited 2020/10/20]
- アラン・ペイカー 2009. 『地理学と歴史学 分断への架け橋』原書房
- 小浦久子 2008. 『まとまりの景観デザイン - 形の規制誘導から関係性の作法へ -』学芸出版社
- 武内和彦 2006. 『ランドスケープエコロジー』朝倉書店
- 竹中克行 2012. 『スペインの地理学 - アカデミック地理と職業地

理の実りある関係 -. 地学雑誌 121-4 : 650-663.

鳥越けい子 1997. 『サウンドスケープ - その思想と実践 -』 鹿島  
出版会

中川理 2008. 『風景学 - 風景と景観をめぐる歴史と現在 -』 共立  
出版

フランセスク・ムニョス 2013. 『俗都市化 - ありふれた景観 グ  
ローバルな場所 -』 昭和堂